

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

法貴 遊

## 【所属】(助成決定時)

京都大学大学院文学研究科

## 【研究題目】

カイロ・ゲニザ文書から読み解く中世アラビア語圏の医学思想と医療実践

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究は、10～13世紀にかけて書かれたカイロ・ゲニザ文書を読み解き、中世アラビア医学(中世アラビア語圏の医学)における理論と実践の諸相を解明することを目指す。本研究は、カイロ・ゲニザの医学関連史料の中から1) 医者以外の人物による治療を記録した書簡と、2) 著者不明の『医者不在のときに賢明な人が充足する書(Kitāb ghunyat al-labīb inda ghaybat al-ṭabīb 以下、充足)』の写本を取り上げて、中世カイロの民間医療の実践を具体的事例に即して解明するとともに、当時の医者がそれらの諸実践を医学理論の観点からどのように考察したのかを解明する。本研究は、民間医療という従来の医学史研究ではブラックボックスに入っていた対象を、カイロ・ゲニザの書簡を用いて可能な限り具体的に復元したうえで、その医療実践が、『充足』の中で当時の医学理論の観点から分析されることによって、学術的な医学知のステータスを獲得するプロセスを解明する。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

研究内容は以下の2部門に分けられる

## 1. カイロ・ゲニザの書簡の研究

カイロ・ゲニザから、実際に行われた眼病治療のプロセスを記録した2通の書簡(T-S 10J16.16 と T-S NS 327.93)を発見し、それらのアラビア語転写と英訳を作成した。T-S 10J16.16は、2人の眼科医の間で交わされた往復書簡であり、T-S NS 327.93は医者ではない者が自らの判断で眼病を治療したプロセスを記している。両者ともに、眼病の診断から治療に至るまでのプロセスを詳細に記している。

次に、これらの書簡の中で言及されている眼病の名称とその症状の特徴を特定し、それらの記述が同時代に読まれていた医学書に見られる診断学や病理学的知識を反映したものであるか否かを考察した。そして、その診断結果に基づき、いかなる治療が行われたのかを解明した。最後に、カイロ・ゲニザの書簡に記されている実際に行われた眼病治療のプロセスと、同時代に読まれていた医学書で指示されている治療方法を比較し、理論と実践が合致しているか否かを調べた。両者が一致していない場合、その不一致にどのような意味があるのかを考察した。

## 2. 『充足』を含むカイロ・ゲニザの医学文献の言語的側面の研究

『充足』の写本を入手し、その内容を読解したところ、医学知がアラビア語の特定の定型句に落とし込まれて整理され列挙されているのを発見した。そこで、医学知を体系化するために、アラビア語という言葉そのものの役割が重要であるという発想に至った。このアラビア語による特定の言い回しの反復は、同時代のカイロ・ゲニザから発見された医学書にも見られるものである。そこで、中世アラビア語圏の医者たちが医学的(自然科学的)因果関係を把握する際に、アラビア語という言葉に特有の構造が、その因果関係の把握方法に大きな影響を与えていると推測した。そこでイブン・スィナーなどの論理学と医学書の関連を分析し、アラビア語

という言語の言語的・論理的特徴が医学知をどのように構造化したのかを明らかにした。

【結論・考察】（４００字程度）

1. カイロ・ゲニザの書簡の研究

2 通の書簡に記されていた眼病の診断から治療に至るプロセスは、概ね同時代の医学書に見られる診断論と治療論の観点から解釈可能であった。四性質説や四体液説は民間レベルでの治療でも活かされており、医学書に見られる医学理論は、実際の治療を方向づける指針として機能していたことが明らかになった。ただし、理論的に要請される治療でも、痛みを伴う治療は忌避される傾向があった。

2. 医学文献の言語的側面の研究

『充足』を含むアラビア語文献に見られる医学的現象の因果関係を表す記述の特徴を抽出し、その特定の定型句が、古典アラビア語文法学やカラームの学（イスラーム神学とも訳される）に遡るものであることがわかった。アラビア語圏の医学者が医学的な因果関係を把握する際に、アラビア語特有の言語的構造が大きく影響を与えていたことが明らかになった。アラビア医学は、単なるガレノス医学の受け売りなのではなく、アラビア語文化圏に特有の発展を遂げたのである。